

<第3部> 全体会まとめ「私たちが考えるひょうごの市民社会のこれから」

1. 登壇者

・各分科会報告者

第1分科会：松田康之さん（社会福祉法人神戸 YMCA 福祉会）

第2分科会：中山光子さん（認定NPO法人宝塚NPOセンター）

第3分科会：鬼本英太郎さん（ひょうごボランタリープラザ）

第4分科会：浅見雅之さん（NPO法人神戸まちづくり研究所）

第5分科会：小嶋新さん（NPO法人しゃらく）

・コメンテーター

金澤和夫さん（兵庫県副知事）

松原明さん（認定NPO法人シーズ・市民活動を支える制度をつくる会）

・コーディネーター

実吉威さん（認定NPO法人市民活動センター神戸）

2. 議論内容

○実吉：

第1部では、兵庫の市民社会・市民活動20年を相川さんに、地域フォーラムの報告を中村さんにしていただきました。その後の松原さんの基調講演では、将来はいろいろ暗いけれども、NPOが果たすべき役割はあるのではないか、その為にももっと勉強して専門性を高める必要がある、というお話をしました。

それを見て各分科会で議論いただいたことを、今からご報告していただきます。

それから、金澤副知事と松原さんからコメントをいただき、前の8人でやりとりをします。各分科会報告は1人3分位でお願いします。では早速、第1分科会からお願いします。

○松田：

第1分科会のテーマは教育でした。分科会には、姫路市の小学校で教員をされている三浦さん、地域で子どもたちの居場所づくりをされているNPO法人まなびとの中山さん、不登校の子どもたちのための神戸フリースクールの竹林さんの3人を迎えて、それぞれの実体験をまずお伺いして、その後ディスカッションを行いました。

三浦さんからは、総合的な学習の時間が非常に有効な時間で、地域の人と学校が一緒になって子どもを育てていく。そしてそれは地域の人にとっても学びの価値になるものにいかなくてはならない、というお話をありました。

中山さんは、どんな子でも生まれたからには可能性をたくさん持っている。自分が生きているこ



とは、誰かのためになる。生きていることがうれしいなと思えるような場を大切にしたい、というお話がありました。

竹林さんからは、現実的に不登校になっている子どもたちや若者の厳しい現状の報告があり、だからこそ多様な場で、子どもたちのいのちを守って育んでいかなくてはならない、というお話がありました。

竹林さんは、「教育は市民運動だ」とおっしゃいました。これは第1分科会でのお話に共通する名言でした。つまり、学校教育も含めて、既存の制度で上手くいかないときに諦めるのではなく、市民1人1人が声を出して社会を変えていく必要があると。

最後に、子どもは教育をされる側ではなくて、大人が教えてあげる側でもなく、パートナーとして大人も学び子どもも学んでいく、そのような教育環境がこれからの日本には必要だし、兵庫からそれを作つていけたらと感じました。

○実吉：

第1部の議論につながるところは？

○松田：

多様性やおおらかさが社会全体から失われている、ここにいる1人1人がおおらかになっていくことが大事だ、という話がありました。もうひとつ、教育をビジネスの場にしてはならない、という意見もありました。

○実吉：

ありがとうございます。続いて第2分科会をお願いします。

○中山：

私たちの分科会には、ホームホスピスを運営されている宝塚つ・む・ぐの家から西野さん、神戸で引きこもりの支援をされている神戸オレンジの会の藤本さん、関西学院大学の人間福祉学部の藤井先生の、3の方にパネリストとして来ていただきました。

西野さんは、介護福祉士や看護師などの専門家が集まって、人の最期を見取る家を運営するNPO法人を3か月前に立ち上げられ、今朝初めての人を天国に送られた話を伺いました。

オレンジの会の藤本さんからは、最初はセルフヘルプグループの親の会から始まり、その後は親でない人が、引きこもりという閉鎖的であり人とは話したくない人を、外に出そうとされてきた歴史をお話されました。

藤井先生から、この2人の活動は制度がないところで活動されていること、新しいケアの開発を実践されていること、生きづらさがある人たちへのソーシャルアクションの場であること、という話がありました。

その後皆さんでグループに分かれてディスカッションを行い、その中で、引きこもりや看取りという、これから地域の中で抱えるであろう社会課題を、どうやって社会システムにしていくか、がこれか



らの課題なのだとと思いました。

○実吉：

ありがとうございました。今の最後の部分が、第1部を受けての話ですね。それでは、第3分科会をお願いします。

○鬼本：

第3分科会のテーマは災害でした。登壇者には、いろいろな自然災害の被災地に支援をされている被災地NGO協働センターの頼政さんと、社協のスタッフとして全国に支援に行かれている加古川市社会福祉協議会の本山さんと、被災地には行かずに地元神戸でできる支援を行っている認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸の飛田さんに来ていただきました。

頼政さんからは、最近の災害では、社協だけではなくて、地元のNPO、支援のNPO、建築業などと一緒にになって支援に取り組む協働型という形が進んでいることが多い、というお話をありました。

本山さんからは、本来いろいろな生活支援をしなくてはならない社会福祉協議会が、災害時には法律で定められていないにもかかわらず災害ボランティアセンターを運営していることの限界について、お話をいただきました。

飛田さんからは、被災地から神戸に避難されてきた方に、行政と連携して、家財や引越しサービスの情報提供を行っていることと、日ごろから行っている居場所づくり活動から、人がつながっていくことが幸せであり、そのことが災害時にも生きてくるのではないか、というお話をありました。

災害支援の仕組みは、被災者を支援する側とされる側という関係でなく、身近な地域の人がNPOと一緒に参加することでより一体となつた仕組みへと変化していく必要があるのではないか、という話になりました。

○実吉：

ありがとうございました。第1部で出された参加と協力の話がちりばめられていました。では、第4分科会をお願いします。

○浅見：

第4分科会のテーマは、地域・コミュニティでした。登壇いただいたのは、明石市と垂水区の間にある古いけれど比較的新しい明舞団地のコミュニティ活動の支援を行っている初田さんと、江戸時代から続いている旧村で今はまちづくり協議会となっている深江地区から会長の田中さんに来ていただきました。

2つの対称的な地域で共通の課題になっていることは「地縁社会の運営は自治会じゃないとダメなのか」ということでした。田中さんから「自治会とNPOは対極にある。なぜなら自治会には志がない（惰性と勢いでやっている）」という名言がありました。

もうひとつ「中止になってしまったお祭りを、自治会ではなくて別の形で、みんなができるお祭りをしている」という話がありました。深江では、新しいお祭りを自治会や小学校区とは関係ない旧村の神社でやられているそうです。深江地区は、震災後に残っている人は2割で、8割の方が入れ替わっている。そのような地域で心配されているのは、人間関係が希薄になって、人々の挨拶の声が聞こえないということ。お祭りのときには、例えば子どもをテーマにするなど、何かひとつのことを共有することが大事だということでした。このことは、第1部の松原さんの話にあった「みんな得たいものは違っても、真ん中にあるものが大事」ということにつながる、と思いました。

○実吉：

ありがとうございました。それでは、最後に第5分科会をお願いします。

○小嶋：

第5分科会のテーマは人権で、サブテーマは、地方のNPOは政策をつくれるのか、ということで話を展開しました。ゲストは、LGBTの家族と友人をつなぐ会の堤さん、RINKの早崎さんの2人でした。LGBTの家族と友人をつなぐ会は、LGBTの当事者の子を持つ親や友人の会で、神戸、東京、名古屋、福岡の4拠点での活動をされています。RINKは、外国人労働者の相談を大阪で請け負っている団体です。



明らかになったことは、地方のNPOが、東京の霞が関や永田町に意見を言うのは、物理的に困難なので、東京にある中間支援的な団体と連携して、彼らが自治体にプロットをする時に、全国でお互いに常時ネットワークを完備しながらやり取りをして、自分たちの意見を言っていくという構造をとっていくことが現実的ではないかという話がでした。

もうひとつ、1つのテーマではなく、例えば人権だけが切り口でなくて、複数の問題が関与しているので、お互いに連携してプラットフォーム的に政策提言した方が、特にローカルでは生きるのでは、という話がありました。

最後に、それぞれの団体では支援者が足りていない、もう少し各団体と連携して、お互いに関係する人を巻き込んでいかなければいけない、ということです。LGBT関係で使う言葉で、ALLY（アライ）という言葉があります。当事者でも家族でもないし支援者でもないが、どんな問題に対しても賛同してくれる人たちが大事だな、と思いました。

○実吉：

どうもありがとうございました。第3部の共通テーマは、私たちが考える兵庫の市民社会のこれからですが、これでビジョンが見えてきましたでしょうか？

コメントーターのお二人には、後程お話ししていただくとして、まずは中山さんに、これから持続的に素晴らしい活動をするには、どうしていったら良いのか、その方向性やアイデアがあればお願いします。

○中山：

方向性、アイデアというのではないのですが、むしろ中間支援として宿題をもらったと思っています。これまで表面化していなかった活動をどうやって表現していく、同じ活動をしている人とのネットワークをどうつなげていくのか、が課題と思いました。

○実吉：

現場を横に連携しあって情報交換して個々でできないことを皆でしようということを、もっといろいろな分野で起こしていきたい、それが中間支援の1つの大事な役割だと思います。小嶋さんに、政策提

言はとても大事ですが、具体的にどうエンパワーメントするのか。当事者の団体、運動している団体だけの課題ではないですよね。次のアクションプランはありますか？

○小嶋：

あくまでも個人意見ですが、15年以上前に制定された性同一性障害特例法のとき実際にとられていた手法というのが、ある大学の先生が音頭をとって、性別違和を感じる人たちの同時多発的な裁判がありました。それから直接的に法律制定に影響したのかはわかりませんが、そんな手法が取られていました。このような昔取られていた社会運動などの政策提言の方法を引き継いでこなかったのではないかと疑問に思うのです。それをアップデートするための勉強をしなくてはならない、と思いました。

○実吉：

非常に大事なポイントですね。他のお三方からは、これを言っておきたいというようなことがありますか？

○鬼本：

災害ボランティアセンターの対応についても、ある意味今のままでは限界にきてていると思います。もともと NPO というのは 1 人でできないことを共同で行うものなので、もう一度災害時にどうするのかなど、制度の組み換えなどを提言する良いチャンスなのではないか、という発言がありました。

○実吉：

そういう仕組みへのアクションや声を出すことが足りていない、ということですね。

○松田：

日本の教育は、OECD の中でも最低レベルの教育への予算です。子どもに対する先生の数、大人の数が少ないことも課題です。これからは高齢者の方は何もできないという見方ではなくて、教育に関わっていただくななど、制度を越えて教育をよりよくしていくという動きができるのではないか、という話がありました。

○浅見：

少子高齢化が進む中で、地域コミュニティがそのうちやばいことになることは、どう見ても明らかです。近年、地縁社会をどうやって新しい形に変換していくのかということが問われていて、これが最先端の話題だと思います。それを成し遂げるのが NPO なのかどうかはまだわからないですが、新しい形を見出せるしたら、それはきっとこの兵庫からだと思っています。

○実吉：

このことはみんなが聞いたかったことだと思います。全体への感想を含めて、松原さん、コメントをお願いします。

○松原：

共同体というのは、代々制度的にあって伝統的で、お互い同じ価値観を持った集団でした。近代は、独立した個人が自由でバラバラになった社会で、そこをお互いに協力してみんなが一緒にやっていくためにどういう仕組みを作るか、ということが市民社会の大きな課題で、そこから NPO の議論が始まっています。

社会も、NPO も、個人もみんな困りごとを抱えています。自分の困りごとばかり言っていたら協力はできません。自分が行っているプロジェクトが、相手の困りごとにどう貢献するか、ということで協力を組み直していくことが大事なのです。

今日の地域共同体の話はまさにこの話で、地域共同体もみんな困っているのです。例えばまたネコの話になりますが、地域には野良猫がたくさんいます。地域からすると、野良猫に餌をやる人もいて、ご近所トラブルもたくさんある。地域だけでは解決できないところに、猫の専門家の NPO が入ると、猫に避妊手術をして、地域で飼う人を決めて、きちんと周りの人とコミュニケーションをとる、という解決策を提案してくれる。

共同体には人はたくさんいるが解決のノウハウがない。逆に NPO にはあまり人はいないがノウハウがある。大事なことは、お互いの困りごとがちゃんとわかって、それをどうやって協力にもっていけるかです。どんな問題でも、地域だけでは無理だし、行政が全部をやりきることもできない。では、どうやってその協力体制を作れるか、協力のデザインの仕方を考えていくようにしましょう。

今日の感想は、各分科会で取り上げられていた様々な問題は昔からあって、みんな困っているのです。まずは、自分の困っていることではなく、相手の困っていることを考えて、そこから自分の困りごとを合わせてみる。すると、相手も乗ってくるのです。このように協力の考え方を変える必要があります。

もう 1 つは、これからは地域の問題は地域だけでは解決できない。地域で震災が起ったときには、みんな自分のことでいっぱいになる。地域を越えてどう専門的なネットワークをつくるか、それが NPO の仕事です。外の助けを、地域で受け取れるようにする専門性が大事なのです。

○実吉：

ありがとうございました。少しだけ時間を延長させてください。このあとは副知事にお伺いします。第 1 部では兵庫県は震災以来の伝統があって、県民の参画協働を大事な旗印にしてきましたが、最近県政の大きな方針の中で、参画、市民活動、NPO といった言葉が減ってきて不安だという声がありました。ご意見やコメントをお願いします。

○金澤：

率直に行政は、改めて住民の皆さんとの関係の作り方に迷いを感じている、模索の段階になっています。もともと共同体は、行政と住民との間をうまくつないでいました。それが近年では機能しなくなっています。経済社会が、成長時代から成熟時代になって、住民 1 人ひとりのニーズも多様化しており、地域社会の中の入れ替わりが大きくなってきました。昔から一緒の人が住んでいるのではなく、互いに顔の見える人がいなくなっています。だから、既存の地縁組織がうまく機能しなくなっています。では、どうやって 1 人 1 人の方と結びつくか悩みが生じているのでしょうか。

もう 1 つは、今日の分科会で取り上げられていた、看取りや、引きこもり、LGBT などは、非常に少数の人たちが対象で、行政はある程度多数の大きい声を聞く仕組みはありますが、1 つ 1 つの少数の人の課題に、1 つ 1 つ答えていく緻密さに欠けています。欠けていて良いのかと私自身も自らに問い合わせています。そこを担って下さるのが NPO の皆さん。阪神・淡路大震災から 20 数年、その歴史が NPO の歴史です。

日本の経済社会ではその期間に対して「失われた 20 年」という言葉があります。日本の経済社会自体も、これまでの路線が変わって、どうしたら良いのか、答えを見つけられない期間が 20 年あったのです。これがちょうど、NPO 法の 20 年と被っています。行政と社会をむすびつけるための、中間のつなぎをやってくれる仕組みを模索し続けてきて、まだ答えが見いだせていません。

兵庫県はもともと、全国の中でも県民運動が活発な歴史をもっています。それがなんなく弱まっているかもしない。これまでの県民運動の中で消費者団体や婦人会が主に中心を担ってきたが、今のNPOの皆さんを県民運動という形で、上手く結び付けられているのか。上手く結びつけられないのが、参画と協働の力が低下してきたように見える理由かと思います。

これは、今でも模索中です。私自身もいろいろお話を伺って、NPOの皆さんとの果してきた役割はよくわかります。それと県政がどういう関係をつくりあげるべきか、十分に答えを得ていません。妙な形で関係を作り上げると、旧来の古典的な自治会等が力をなくしてしまったような、そんな構造にまたなってしまうかもという懸念も感じます。何か次の時代に向けて、新しいNPOのみなさんとの関係の作り方があるのではと思います。

○実吉：

どうもありがとうございました。みなさん、今の副知事の意見に対して関して何かありますか？

○浅見：

20数年模索したなら、そろそろ答えが欲しいですね。これだけの人がいるから、みんなで考えたい。

○実吉：

県に対して言っているわけではなく、お互いにですよね。

○浅見：

そうです。もちろん私達も考えないと。

○金澤：

お互いに正しいと思う答えでないうまくいかないと思うのです。

○実吉：

答えを出すための、対話や議論が足りないのでないのか。第1部で県政の姿勢がという意見が出たが、一方で、市民活動側からのアドボカシーも弱くなっているのではないかでしょうか。それはこちら側の課題もある。対話も同様です。

今、副知事から少数の人の立場を代弁する市民活動は大事だ、という話がありました。同時に、行政も模索しているという、建設的なご意見をいただきました。あるべき仕組みとは何かを、しっかり議論する時間が必要と思いました。まさにそのためにも、対話の場を持っていこうという姿勢を、県の側からもぜひ出してほしいです。

○金澤：

これから日本社会のキーワードは、多様性ではないかと思います。外国人だけではなくて、引きこもりやLGBTの人が声を上げたらどうなるか、そういう意味も含めて地域社会から多様な問い合わせが出てくる



る。それらをひとつの地域のためのエネルギーとしてまとめる、という資質が行政に求められていると考えると、まず入口は多様な人たちが求めていることを聴き取ること、そのときに NPO として立ち上げて育てるときの独自のノウハウや知恵が、我々にとっても参考になる。その意味では、実吉さんのおっしゃるとおり、まだまだ努力がいるかもしれません。

○実吉：

最後の副知事の発言で、全体をまとめていただきました。県政の責任ある方も多様性とはつきりおしゃっている。このことは NPO 側にも問われている部分だと思います。我々も現場の中で、問い合わせて、形にしていく。そこからいろいろな対話をしていく。今回 NPO 法 20 年という記念の場でしたが、こういう場を 5 年に 1 回ぐらいのペースで行っていきたい。もう 20 年も探し続けているから、そろそろ実践の中で答えを出さなくてはならない。行政とも地域社会とも一緒にやっていく。そんな次の 10 年にいかなければと感じました。皆さんありがとうございました。

参加者アンケート

問 1：どのような動機で、または何を知りたくて当フォーラムに参加しましたか？

- 松原さんの話が聞きたい
- 今の神戸の NPO の現状・雰囲気を知りたかった。
- これからの NPO 団体のあり方について知りたかった為
- NPO の活動全般 各場所フォーラムの参加させていただいて刺激を受けより多くの方々から学びたいと感じたから。
- 仲間とより深め新たな仲間を増やしたいから
- 現、活動している者は実際の見えない聞こえない障害者にどのような対応が出来るか見てみたかった。
- NPO の潮流を知りたい
- 教室ボランティアの状況を知りたかった
- 基調講演・会長として・参加者の意識共有
- NPO 活動の今後の展開に関心があつたため
- これからの NPO 市民活動のあり方を学ぶため。様々な NPO 活動されている団体を支援するため
- NPO が今後何をしていくのか、どのような思いを持っておられるか知りたいと思った
- NPO 全般
- 業務で NPO を担当しており、より深く活動を理解するため
- 県内 NPO の状況を全く知らなかつたので来てみました。
- これからの NPO としての地域における発展。自身の活動の繁栄に必要な物はなにか？
- NPO について勉強したくて参加
- 代表が作った NPO・ミッション達成の為次代につなげる為のヒントをもらいに来ました。
- NPO のこれから
- NPO のことを見直しなくて
- 地域づくりとかボランティアとか災害とかでお話ししなければならない機会も増えたので最近の NPO 法人の発信を聞こうと思い
- 街づくり協議会に関わっており最近の市民活動に関わる方々のお話を聞いたかったです。NPO の最近の動きも知りたかった
- こんな発表があるんだというインスピレーションだけで参加した。参加して良かった。
- 今後の NPO の行先おつきあい+松原さんのお話

問 2：何をきっかけに当フォーラムをお知りになりましたか？（複数回答可）

項目名	人数
チラシ	10
ホームページ	3
知り合いから	7
メールマガジン	3
メーリングリスト	4
その他	5

問 3：当フォーラムのプログラムについて教えて下さい。（プログラム別評価）

(1) 記念講演

評価		
良い	5	16人
↓	4	9人
	3	1人
	2	0人
悪い	1	0人

(2) 分科会

評価		分科会 1	分科会 2	分科会 3	分科会 4	分科会 5
良い	5	1人	3人	0人	2人	0人
↓	4	2人	1人	2人	7人	0人
	3	0人	0人	2人	1人	1人
	2	0人	0人	0人	0人	0人
	悪い	1	0人	0人	0人	0人

(3) 全体会まとめ

評価		
良い	5	2人
↓	4	4人
	3	2人
	2	1人
	悪い	0人

問4：当フォーラムで印象的だったことや記憶に残ったことをお書きください。

- 参加と協力の重要性。
- NPO の支援の仕方・あり方について(アソシエーション→プラットフォーム)。
- 多様な人をまとめたプラットフォーム作り。
- 実行委員の皆さまの熱心さに素晴らしさを感じました。具体的な事前で参加・連携の重要性をさらに深く学ばせていただきました。教育は市民運動。
- 情報保障のスタッフさんの配慮がとても良かった。
- 様々な団体が参加し、多様な意見がきかれた。
- 総合学校の 72 時間くらい、外部委託できると聞いたこと。
- NPO(市民社会)2.0 についての松原さんの提起。
- 多者協働型プラットフォーム。
- それぞれの NPO の活動には、特徴がある。一堂に会しこからの活動についてをテーマに意見を交換できることは凄いこと。NPO2.0 のつながりが印象に残った。「参加と協力」これからの地域づくりにも大切なことだと思った。
- NPO の活動はワンピース型にならなければ、という松原さんの言葉。
- 講演の中でこれからの NPO の生きる道はプラットフォーム型だというお話が印象的だった。
- アソシエーション→プラットフォーム そこに参加するものが何を共有するか、できるか。
- 地域とつながりは共になにを共有できるか。20 年後「将来」のために出来る NPO の役割。
- NPO2.0!! 目指したい!!
- アソシエーションからプラットフォーム プラットフォーム型の活動を考えたいと思いました。
- 時代の行き詰まり感。
- 盛りだくさんだなと思いました。分科会も、もっと時間があって長くて分科会でのエッセンスをもっとしっかり踏まえていただいた上でしっかりと全体会で深めて欲しかったなど。一日でしなくてもいいのに。
- 現実は暗いけども明るくできることをしていこうという松原さんのお話し。宝塚のホスピスの方と神戸の引きこもり。
- 参加して松原さんの参加と協力の意味をあらためて確認できました。
- 分科会④でのファシリテーション講師のファシリ力とホワイトボードへのライティング力 田中さんの「何を共有するか」というテーマ。
- 松原さんからの NPO のモデルチェンジ(アソシエーションからのプラットフォーム)。

問5：更に知りたいこと、議論したいことはありますか。また、明日からどのように生かしていきたいと思いますか？

- NPO2.0の話はNPO自体の話しというよりは、協働やパートナーシップの重要性の話しのように聞こえたNPO自体がプラットフォームになるというのは難しいような。
- 今後の具体的な先進事例について。困りごとの解決方法をさらに知っていきたい。まず相手の困りごとも考えて解決していくようにしていきたい。
- 多様性のキーワードは念頭においておきたい。
- 新たな市民社会の実現に向けて行政の施策として必要あることについて引き続き模索していきたい。
- 新しい参加と協力のスタイル。
- NPOを今まで以上に地域課題に関わることができるようワンピース型を機会あるごとに提起していきたい。
- ソーシャル・ビジネスについて考えてみたいと思います。
- ミッションの達成には何が足りなくて何が必要か改めて強みと弱みを確認し地域資源をいかに活かせるか巻き込めるか、一つの目的を共有できる様職員間で発展を話していきたい。
- もう一度所属するNPOのミッションを見直し仲間を増やす。関係を深める。
- 強みを地域に生かしていきたいです。
- 具体的なNPO間・地域内ネットワークの作り方 成功例地縁団体のNPO化事例。
- NPOというセクターでつめていく場もとても必要だと思いますが他セクターとは出会う場はあるけど議論する場共同で何かする考える場は少ないと思います。(そういう意味では神戸はまだ平和なのね)これからはそんな平和になることを期待します。
- 地域の街づくり計画の策定委員の方々やまちづくり協議会のメンバーに伝えていきたいです。
- NPOの地元への参加の壁をやぶる方法。
- プラットフォーム型に必要有「専門家」について。

NPO 法 20 年全県フォーラム実行委員会

1. 実行委員会メンバー（五十音順）

- ・相川康子（NPO 法人 NPO 政策研究所）
- ・一川有希（NPO 法人シミンズシーズ）
- ・江口聰（認定 NPO 法人しみん基金・KOBE）
- ・鬼本英太郎（ひょうごボランタリープラザ）
- ・柏木登起（NPO 法人シミンズシーズ）
- ・小嶋新（NPO 法人しゃらく）
- ・実吉威（認定 NPO 法人市民活動センター神戸）
- ・菅野将志（NPO 法人ワカモノヂカラプロジェクト）
- ・津久井あゆみ（NPO 法人シミンズシーズ）
- ・中山光子（認定 NPO 法人宝塚 NPO センター）
- ・野崎隆一（NPO 法人神戸まちづくり研究所）
- ・松岡千尋（NPO 会計支援センター）
- ・松田康之（社会福祉法人神戸 YMCA 福祉会）
- ・山崎速嗣（一般社団法人ウルノス）
- ・山崎清治（NPO 法人生涯学習サポート兵庫）

2. 実行委員会日程

回	開催日時
第1回	2018年8月31日 18:30～20:30
第2回	2018年10月19日 18:30～20:30
第3回	2018年11月8日 18:30～20:30
第4回	2018年12月27日 18:30～20:30
第5回	2019年1月28日 18:30～21:30
第6回	2019年3月26日 18:30～19:30

NPO 法 20 年全県フォーラム実施報告書

発行日：2019 年 3 月

発 行：NPO 法全県フォーラム実行委員会

ひょうご市民活動協議会（HYOGON）

事務局：ひょうご市民活動協議会事務局

〒675-0065 加古川市加古川町篠原町 111 番地 NPO 法人シミンズシーズ内

TEL 079-422-0402 メール hyogon_office@hyogon.net

助 成：兵庫県県政 150 周年県民連携事業

平成 30 年、兵庫県は成立 150 周年を迎えます。この節目にあたり、ふるさと兵庫を再認識し、新たな兵庫づくりを考える機会とするため、当該事業を実施します。